
仮面ライダーギルファス：R

宮参鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーギルファス：R

【Nコード】

N1297F

【作者名】

宮参鬼

【あらすじ】

電王が日本のイマジン達を倒していた頃、世界中のイマジンを一手に引き受けた男が居た。記録に残らなかった赤と緑のライダーの話……

第一話「正義じゃない、私利私欲だ」

ー 1986年・ニューヨークー

「あだあつ！」

高層ビルの屋上と、男の頭頂部がキスをした。

書くのも憚られるような罵声と金属質の落下音がそれに続く。

頭を摩りながら立ち上がった男は、怒りの籠った視線で天空を睨みあげた。

空には満月。一点の曇りもない黒いキャンバスを煌々と照らしあげていた。

その月光に照らされて蒼い列車が巨龍のように悠々と空を舞う。

巨龍の口から産み出された線路は後へ後へと続き、電車の進むべき道を造りだしていた。

「列車を下ろせーっ！下ろしやがれーっ！いやむしろ下ろさないと耳にPSPを突っ込むぞーっ！」

喉も裂けんばかりの男の怒鳴り声がビルの谷間にこだまする。

と、男がつけていたインカムから女性の声が響いた。

「落ち着いてください。いいですか、まずはベルトを手に取り任意の変身コードとポーズをお願いしますです。私の方で暗証登録させていただきますので」

女性の声は幼く、むしろ子供のそれを連想させた。

子供らしからぬ淡々とした口調がさらに男の不安を煽る。

「・・・はあ？」

「早くしたほうが宜しいかと。あなたに自殺願望があるようには見えませんが」

「君は何を言ってるんだ？」

「・・・わかりました。変身コードとポーズを入力していただけた

「この列車、ギルライナーを下ろすです。これで問題ありませんね？」

「よーし、分かったあつ！」

男は目を輝かせて、少女の声が先程まで漏れていたインカムをビルの谷間めがけて放り投げると、右手にぶら下げていたベルトを腰に叩きつけるようにして一気に装着した。

「HEN SHIN」

「Psychedelic form」

男がおもむろに両手を横に広げ、一方を握り拳、一方を平手にして胸の前でかち合わせた。

陳腐で凡庸な決め台詞を妙な抑揚で吐き出すと同時に無機質な機械音声がベルトから響く。

刹那、碧の吹雪がベルトから放出された。

「なっ、ちよっ、うわっと!？」

驚きの余りあたふたとタタラを踏む男の意思とは関係なく、変身プロセスは着々と進行していく。

男の全身に黒い強化服のようなスーツが瞬時にして装着され、体の周囲を二本の線路がXを描くようにして取り囲む。

あっという間に線路に乗っていた複数のキテレツな碧の装甲板が体に引き寄せられていき、男の体を包む鎧と化した。

さらに顔面から後頭部に向かって走るX字型のラインの端に四つの金属板が装着され、顔の中心部ーX字が交差しているーで合体しノブを廻すように一回転、バイザーのついた派手な仮面を構成する。

これらの作業が完了するまで、わずか数秒であつた。

「かつこよすぎる………」

男は体のあちこちを触りながらそう呟いた、次の瞬間。

ガシャアアアアアン！

硝子の割れるような音を立て、男の左半身が砕け散つた。

いや、正確には左半身を覆う装甲が砕け散つたというべきだろうか。バイザーの左半分はへし折れたかのように欠損し、カメレオンの目を思わせる視覚センサーと思しきものが露出している。

胸を覆っていた緑の装甲も半分が砕け散り、大胸筋を思わせるプレートと臓物のような内部フレームがむき出しになっている。

「ご、ごおお」

男は地面に膝をついた。

装甲の破損に伴い、丸太で殴られたかのような衝撃が男を駆け巡つた。

「はやく……列車を……降ろして……」

男の右半分視界を覆うバイザーには、ノイズ交じりの下界が移っている。

と、視界の端に何か動くものがあった。

「イレギュラーです。局長、どうします?」

天を往く蒼龍、ギルライナーの内部である。

壁際にコンソールが並び、レバーやボタンが並んだパネルに椅子が据え付けられているところを見ると、何かの通信室であろうか。

椅子に座っている先程の声の主〓シルクハットを被り、ゴシックロリータ調のドレスに身を包んだ少女は、コンソールに設置されたマイクに向かっていた。

「はあ、でも彼はまだ保っていますヨ?このまま様子をみてはいかがですかネ」

「現在の状況は一時的なショックを受けたのみ、極めて良好です。左装甲の破損もバイザーのレフトが使用不可以外に影響はないです」

「ヘッドユニットの損傷は?」

「皆無です。前述のバイザーの被害を除けば」

マイクから聞こえてくる飄々とした男性の声は、どこかこの状況を楽しんでいるように思えた。

「結構。健康被害の出ない程度に電流で脳を刺激、脳内麻薬を分泌させてみるのはどうですか?いくらかの怯えが見える彼の助けになるかもしれませんヨ」

「了解です」

「後はいくらか貴方のほうでもアシストをお願いします。いくらなんでもあれでは戦いに不慣れでしょうしネ」

男の足にツタのようなものが絡みついた。

「うわっ!?!」

地面に膝をついていて、もともと不安定な体勢だったところにバラ

ンスを崩され、男は前のめりに倒れこむ。

「う、うわああああっ！」

顔を上げた男のバイザーには、信じられないようなモノが映し出されていた。

異様に細い薄緑色の手足に、竹を思い起こさせるような円筒形の頭部。

男の足を締め上げるツタの根元〓無数に枝分かれた指と、水干のような衣装。

そして、裂けたような両目から覗く・・・悪意に満ちた黄色い光。どうやらビルの下からここまで這い上がってきたのだろっ。

月光を受けて白々と輝く姿は、この世のものとは思えないほど醜かった。

「お嬢・・・早く・・・降ろして・・・」

「落ち着くです、あなたなら大丈夫です」

ヘルメットを通して女性の声が再び響く。

「そもそも私はギルライナーを降ろす気なんて皆無です、降ろして欲しかったらそのイマジンを倒してからです」

「・・・」

「大丈夫です、あなたならできます」

ギャギャギャアアアアン！

男の足裏に装着されていたローラーが高速回転しだした。

足に絡み付いていたツタがズタズタに寸断されていく。

モノが大きく仰け反り、大木が倒れるかのような音を立てて後ろへ倒れた。

「わわわわわ！」

山椒魚のように這いずって逃げ出そうとする男に女性の声が響く。

「逃げないで。いいですか、あなたがここで逃げたらあなたの居る世界が変わってしまいます」

「な、何を」

「理由はあとです。今はアレを倒すです。あなたになら絶対に」
「無理だ！あんな化け物とどう戦えと！」

コンソールに囲まれながら、少女は目を閉じた。

幾千の祈りを込めて。幾万の力を込めて。

・・・営業スマイルも忘れずに。

「あなたは私が選んだ人間。倒せないはずがないのです」

あなたに、幸あれ・・・

その言葉を最後に、女性からの通信は切れた。

「・・・・・・・・」

男はゆっくりと立ち上がった。

まっすぐと。しっかりとコンクリートを踏みしめて。

もう、何も怖くない。

男は体勢を立て直したと思いきモノのほうへ全力疾走していった。

「根性、見せてやる！」

当たり前のことだが、地球には引力が存在する。

これまた当然ながら、ビルの谷間から人が飛び上がれば、しばしの滞空時間を経た後地面めがけて落下していくのもなんら不思議では無い。

無論、この男とて……

「だらららららららあーッ！」

悲鳴とも呐喊ともつかぬ奇声を上げながら男は地面めがけて急速落下していった。

「離れるッ！」

自ら掴みかかったはずのモノを、男は空中で蹴り飛ばし、突き放した。理不尽な。

地面がものすごい速さで近づいてくる。
次の瞬間。

「シルバー・ブルームええっっ！」

全く状況と関連性の掴めない絶叫とともに男が右手を虚空に突き出すと装甲の一部が吹き飛び、先端部に鉤爪の付いた鎖が射出された。鉤爪はビルの壁に食い込み、男の落下速度を徐々に和らげていく。

「と、止まった……………」

地面から数メートルというところで、落下は止まった。

男の眼前には対向ビルの壁面が画一的な表情を晒している。

視線を下に向けると、ちょうど一人一人が落下したような窪みがあり、その奥で先程のモノが痙攣していた。

「う……くあっ」

痙攣が治まったのか、窪みに手をかけて這い上がってくるモノの姿

が、心もとなく点滅する街灯の下に露になった。
擬人化された竹のような姿だが、そうだとしたらモノの創造主は、
竹の事をまったく知らないか、遠い昔に忘れ去ってしまったのだろ
う。

明かりに照らされたそれは、あたかも妖怪変化の類を思わせた。

「しっかしまあ、なんともモテそうにない外見だねえ。かく言う俺
も今は相方はいなーい」

いつの間にか男も地面に降りていた。

肩をすくめて「やれやれ」とでも言いたげなしぐさは書いているこ
っちも不愉快だ。

ビルの外壁には根元から断ち切られた鎖が風に揺れている。

「電王・・・邪魔だてすると容赦はせぬぞ」

モノの両目が、さらに細くなった。

「大事なことから二回目言っぞ。『俺の』未来を作るために・・・
」

男は右手でびしりとモノを指差した。

「根性、見せてやる！」

第一話「正義じゃない、私利私欲だ」(後書き)

どうも、開幕早々放り投げられたインカムの中の人です。
ぶっちゃけこの人に時間を守らせていいのか不安です。
すいません、適当な人材がすぐに捕まらなかったんです。

次回、「赤い瞳に映るもの」。

ご期待くださいです。

第十話「海戦！大鯨海に躍る」

釣りである。

見まごうことなき釣り人である。

釣りキチ三平に、川のぬし釣りである。

「…………釣れない…………」

陽光を受けキラキラ輝く海面に男のぼやきが吸い込まれていく。
毎度お馴染み、宮参鬼である。

海上に浮くギルライナーの屋根に座り込み、釣り糸を垂らしてはや三時間。

未だ浮きは動かず、ボロ靴一足すら彼の針にはかかっていない。

「おーじょーおー、いつまで待てばいいのー？」

「こちらのソナーにも一切反応がありません、じーっと待つです」

「…………大変申し訳ありませんが是非ともワタクシめとポジションかわって戴きやがりたいのですが」

「別に構いませんが、貴方にギルライナーのソナー操作ができますか？私がイマジン釣り上げても構わないのですが、私は戦闘力皆無ですからね、たぶんものの三秒も持たな」

「ブチッ！」

宮参鬼は口で叫ぶとインカムの接続を切った。毎度毎度このアンドロイドは理屈っぽい。

今回の任務は1952年の地中海へとダイブしたイマジンの撃破だ。
「俺泳げないよ？泳げないよ？」とアタフタする宮参鬼にマッドハッターは満面の笑みで答えた。

「釣るです」と。

しかし暑い、実に暑い。

傍らにおいてあるジンジャーエールのペットボトルもすっかりぬるくなってしまった。

麦藁帽子の網目をすり抜けた太陽が宮参鬼の膝にこぼれ落ちる。

「りーくにおりたつふなーのりー、しゃくねつじごくのあーらしいー」

退屈を極めた宮参鬼の口から原曲より半音ほどキーの下がった歌が漏れる。

「いーびつなちれいのそこーではあー、にーびいろのまくがかーかーるー……」

その時浮きが激しく揺れた。

「さーながらせかいはとりかーごお……」

竿を握る宮参鬼の手に力が入る。

浮きが罫にかかった魚のように激しく暴れる。

「決して逃げられない！」

スペインの空に、釣り糸を啜えたイマジンが跳ね上がった。

ギルライナー内部のソナーが激しく鳴り響いた。

サイレン音とともにコントロールルームの照明が赤く明滅する。

「かかった……！」

マッドハッターは手近なマイクを引っつかんだ。

「イマジンが近くにいますよ！ベルトの準備をします！……聞こえてるですか！宮参鬼！？……あの野郎、インカムのスイッチ切りっぱなしです！」

ギルライナーの屋根から激しく揉み合う音が聞こえ出した。

上げ戸を閉めた。

無論、車内に水飛沫が侵入するのを防ぐためである。

「離れる！離しやがれ！」

「あばあばばごぼぼ、ぼがががが」

ギルファスの口部スリットから空気が泡となって漏れていく。

しがみつくギルファスを振り払おうと水の中を魚のように泳ぎまわるシャークイマジンだが、半ばおぼれ掛けながらもギルファスは両腕をしっかりとシャークイマジンに巻きつけたままだった。

この辺りが彼の執念深さを象徴しているのであろう。

「『魚のように』も何も、こいつは魚のイマジンですが」

『やれやれ』といった雰囲気的口調でマッドハッターの通信がギルファスのヘルメットに響く。

「ギルライナーの座標を転送するです、とつとアンカー使つて上がってくるです」

「ごぼげべががが、げぼぼぼぼとこん」

「・・・何言ってるのかわかりませんが、早くあがつてこないと貴方戻れなくなるですよ」

ギルファスのバイザーに簡単な座標が転送された。

ギルライナーの位置が示してあると同時に、ギルファスが居るであろうと思しき位置には「馬鹿」の文字が躍っている。

「がばばば！」

ギルファスはシャークイマジンを蹴りつけ距離をとると同時に初速を付けると、右手のアンカーを射出した。

二分後、ギルライナーのミーティングルーム内にて。

浸水した拳句ずぶ濡れになって変身を解除した宮参鬼と毎度おなじみマッドハッター。

壁に据え付けられた大型のスクリーンにはギルライナーとイマジン

の位置が映し出されていた。

「ひいーはぁー……死ぬかと思った」

「良いですか？イマジンがあと少しでこちらに到達するです。それを一気に迎撃するですよ」

「……魚雷でも使えと？」

卑屈な笑いを浮かべて肩をすくめる宮参鬼に向かってマッドハッターは嬉しそうに微笑んだ。

「ぼちつとです」

スクリーン横のコンソールを操作するとスクリーン上のギルライナーを表す光点が赤く染まった。

「は？」

「上に行つてギエロンの火器管制頼むです、私はいつものように位置の微調整です」

「いや、だから何を……」

「同じことを何度も言うのはキライです、ギエロンを魚雷ユニットに換装したです」

有無を言わずさずといった表情でマッドハッターはコントロールルーム内に入つていった。

「おいおいおい、ジョーズばりの背びれがコッチ向かつて来てんぞ！？」

ギルライナーの屋根に据え付けられた対イマジン用ミサイルポッド「ギエロン」のスコープを覗きながら宮参鬼は叫んだ。

無論、発射の衝撃に耐えるためベルトを使ってギルファスに変身している。

「位置を微調整中です。そのまま撃つても構いませんが命中精度が落ちるです。私の合図を待った方が良いかと」

「……スコープの意味無くな？」

シャークイマジンは激昂していた。

あのギルファスとかいうふざけた男に手傷まで負わされ、過去の世界まで追ってこられた挙句にこの様だ。

どの道このままではもう過去と未来を行き来することはできない。だったらあの野郎をブツ殺してこの鬱憤を晴らすまでだ。

あのスカした顔が苦痛に歪む所をゆつくり鑑賞してやるぜ。真っ赤な瞳が、不気味に歪んだ。

「今です！撃つです！」

「イイイイイイヤツフォオオオオー！」

ギルファスが雄叫びとともに「ギエロン」の発射レバーを右足で蹴り上げた。

36基の小型ミサイルが緩いアーチを描き、青い海に浮かぶ光跡めがけて落ちていく。

自分の勝利をシャークイマジンは確信していた。

奴に飛びついてもう一度水中に引き込めば俺の勝ちだ。

水圧で装甲が凹んだところをズタズタに切り裂いてやる。

その後はあの小娘の始末だ。

いや待て、あの装甲列車は俺が奪って破壊活動に使うか？

次の瞬間、シャークイマジンの体に魚雷三十六発分の衝撃が炸裂した。

水面に巨大な水柱が上がった。

跳ね上がった水がギルライナーの真上に降り注ぐ。

「どひえー、派手ねコリヤ」

「レーダー上から反応が消えました。任務完了です」

地中海に降り注ぐ灼熱の太陽を背負い、ギルファスはいつものように真っ直ぐ伸ばした右手で天を指差し、大きく腰を落とした。

「い・えーい！」

「・・・またその決めポーズですか」

「ノリだよノリ、お嬢ももうちょっと柔らかくなりなよH A H A H A
A！」

「・・・」

マッドハッターは呆れ顔でギルライナーを左右に軽く揺らした。

水面にもう一つ、小さな水柱が浮かんだ。

第十話「海戦！大鯨海に躍る」（後書き）

・シャークイマジン

身長／198cm 体重／180kg

未来人の精神体が「老人と海」のサメのイメージを受けて実体化したものの。

過去へ飛び、未来を変えることを目的としている。

粗暴で残忍な性格で、水中を時速200ノットで泳ぐことが可能。両腕のヒレは鋼鉄をも切り裂く。

どうも、すっかりおなじみになりましたマッドハッターです。

まずはシリーズが再始動した事を喜ぶべきですね、主にギルファス
が。

次回、「幻の撃墜王」相変わらず更新未定ですよ。

第二話「赤い瞳に映るもの」

「ぐはっ！」

赤と緑に染め上げられた歪なボディが宙を舞い、地面に叩きつけられた。

男が啖呵を切ってからどれほどの時間が経っただろう。

「この21世紀に・・・歯車可動・・・とな・・・」

男の呻き声とともに腹部装甲に穿たれた穴からコイルや歯車が零れ落ちる。

地面に落ちた銀色のスプリングが、空しく跳ねた。

「どうした電王、聞いていたほど強くはないようだなっ！」

男を派手に吹き飛ばしたモノが、勝ち誇ったように長槍を掲げた。

槍の穂先から血とも油ともつかない赤黒い液体が滴り、モノの水干に赤い斑点を描く。

「だから・・・電王じゃないと何度言わせれば・・・げぼっ」

男の装着しているヘルメットの口部スリットから赤い液体が吹き出た。

バイザーの内側に表示された外部映像の右下に「DANGER」の文字が明滅する。

「これ以上の戦闘は無理です、下がってください」

ヘルメットの中に先程の少女の声が響く。

「あー・・・この状況でどう逃げると？」

明滅する「DANGER」の文字にアラート音が被さった。

「わかりました、今からギルライナーを下ろすです、持ちこたえてください」

「・・・うん、ソレ無理」

男が苦しそうに答えた。

既に各所の装甲は剥がれ落ち、下地のスーツ部分が見え隠れしてい

る。

水牛の角を思わせる額のアンテナも左部が無様に折れ、今や落ち武者のごとき無様な様相を呈していた。

「収容・・・しないで・・・欲しい」

「何を言ってるんですか？このままだとあなたは間違いなく死亡します。そんなに正義のヒーローになりたいのですか？」

「麻酔か何か・・・ないの？」

「・・・後で痛いですよ」

バイザーの内側で煩く点滅していた「DANGER」の文字が消え、同時に男の背筋に針金を通したような違和感が走った。

「はうつ！」

「スーツの内側に塗布してあった局部麻酔剤の機能を有効化、電極で脊髄を刺激して一時的に痛覚を麻痺させました。後でどうなっても知りませんよ」

男の体から痛みが嘘のように引いていった。

「はっはっはっは電王、その首叩き落してやるぞ！」

仰向けに倒れたまま動かない男めがけて長槍を構えたモノが摺り足で突っ込んできた。

男との距離を一気に縮め、そのまま跳躍すると男の首を地面に縫い付けんとすべく槍を構える。

槍の穂先が、月の光を受け鈍く光った。

赤と緑の顔面めがけて鋼鉄の先端が空気を裂いていく。

今まさに、男の額に槍が突き立たんとしたそのとき・・・

「と、思っていたのか！」

男の右手が立ち上がり、穂の根元をつかんだ。

「何イ！？」

「さっき伐採するって言ったよなあアアアッ！」

そのまま男は右手を派手に振った。

その隙を利用し、男はブレイクダンスのように上半身と両腕を回転させて起き上がった。

「大半の内臓武器が先ほどの損傷で使えませんが、右腕の拳で落ちて来るイマジンを撃破してください」

「簡単に言うな・・・そのイマキタサンギョウとやらを倒せば終わ
りなんだね？」

「いよおしわかった、俺のこの手が光って唸る！」

「唸りはしません。光ります。起動しますよ」

緑色の右腕装甲が加熱により真っ赤に染め上げられていく。

「何か適当な言葉でもあれば、次回からは音声認識であなたが任意に起動できるようにしますよ?」

モノが男の頭上にまっすぐ落ちてくる。

男が右手の拳を突き上げた。

男の拳に貫かれたモノは断末魔すらあげずに爆発した。爆風が収まると、そこには赤と緑に染め上げられた戦士の姿が．．．と書きたいのだが。

「いだい、いだいよ幼女ボイスうううッ」

「あれほど後が怖いと言ったです、収容するまでおとなしくそこで待っていてくださいです」

「びゃあああああうううう」

男の悲鳴が、夜のビル街に空しく響いた。

これが、ギルファスの初陣であつた。

第二話「赤い瞳に映るもの」(後書き)

・バンブーイマジン

身長/201cm 体重/198kg

未来人の精神体が「かぐや姫」の竹のイメージを受けて実体化した
もの。

過去へ飛び、未来を変えることを目的としている。

普段は高潔な武人を気取っているが、自らが優位に立つや否や本来
の残虐な性格を露にする二面性の持ち主。

1986年のニューヨークのビル街に降り立ち、ギルファスの初陣
の相手となる。

当初は戦闘に慣れないギルファスを圧倒、ダウンにまで追い込むが、
局部麻酔で痛覚を麻痺させたギルファスの猛攻によりあっけなく敗
れ去った。

手にした長槍は発泡スチロールをも貫く。

どうも、インカムの幼女ボイスです。

次回は世界観の説明がてらアレコレするそうです。面倒ですね。

次回、「歌う人造人間」お楽しみにです。

第三話「歌う人造人間」（前書き）

アフリカ砂漠。

「サハラ砂漠」という呼び名のほうが自然だろうか。

それとも、アフリカにはサハラ砂漠以外にもいくつか砂漠があるのだろうか。

宮参鬼 捏造はばーっとそんなことを考えながら歩いていた。

宮参鬼は地理に詳しくない。学校では毎回地理の授業にかこつけて地図帳を開き、ページをめくるたびに現れては消える青い空や密林の秘境、あふれんばかりの陽光が微笑む砂漠の景色を夢想していたのだから。

夢想することと学習はイコールではない。上辺をなぞってその美しさや逞しさに見惚れるだけでは知識を物にできないのだ。

足を下ろすたびに踝までが柔らかい砂の中に沈む。

とりあえず、今宮参鬼がわかっていることはひとつだ。

仮説を自己の確信に変えるべく、宮参鬼は空に向けて高々と叫んだ。

「砂漠で迷ったーーーーーあっ！」

第三話「歌う人造人間」

「ここはどこだッ！そして俺は誰だッ！

いや待て、自分の名前は知っているぞ。まあこんなところにホイホイ書いてしまうと個人情報駄々漏れなんで伏せるけどな。ああ伏せるけどな。

落ち着け落ち着くんた俺。素数を数えろ。いやまて家のゲタ箱に置いてある靴なんかの数を数えるのもいいかもしれないぞ。

・・・あれ？靴って左右セットで一足と勘定するんだっけ？それ？まて、まずは落ち着くんた。そうだ、手足の指を数えよう。えーと靴の紐を・・・うっげ砂だらけだなコレ」

「・・・何をやってるですか？」

宮参鬼のつけているインカムから女性の声が響いた。

女性といっても声はまだ幼い。月並みな言葉で言うなら「女の子」とでもいうべきだろうか。

「いやあのその・・・落ち着いて靴紐を解いてたら猫舌星人グロストが」

「何処から引つ張ってきたネタかは存じませんが、あなたの周りにあなたと同質量、近質量の生命体は確認できません。砂中の爬虫・昆虫類と大気中の無数の微生物ならそれこそいくらでも確認できます」

「おお、回線切断回線切断」

「切っているのですか？私と意思の疎通ができなければ貴方はこの広大なリビアで力尽き」
ぶちり

「・・・あ、あれ？これどうやって電源入れなおすんだ！？・・・

おーい！幼女！幼女ー！」

そもそもの事の始まりは一ヶ月ほど前に遡りますかね。そう、2006年の。

いつものように俺は駅の改札をくぐり、特急に乗り込もうとしたんですよ。

いやね、特急の内装が違ったんです。

なんかあのゴムの臭い漂う車内じゃなくて、やたらめったら明るい電球がついてて。通路広いし。

通路の端々になんか得体の知れない機械置いてありますし。シールで封印されてますし。

こう、公安が見たら脳溢血と急性盲腸炎同時に起こしそうな臭いがプンプンな。

いやまあパニック起こしましたね。頭の中で火薬とゼラチンの混合物がスパークしたようなあの感覚。ガンバーレタブチ。

ドア閉まっちゃいますし。窓の向こうからは荒涼たる砂漠と虹色の空見えてますし。

どこだここは。鳥取砂丘か。ギアナ高地か。アブダビか。プイプイ島か。

とりあえず親切な乗務員にでも何か聞こうと思って通路のドア開けるとこれがまたビックリ。

ココホントに列車の中？と思うようなひろーい横幅の車内じゃありませんか。

なんかバーのカウンター席みたいのくつついてますし。私力レー大

好きです。

カレーとジンジャーエールとお汁粉さえあれば世の中安泰です。おまけにとってもお上品なボーカル入りBGMつきですよ。いいなあ。

で、隅っこに高そうなピアノがデデーンと置いてあるじゃありませんか。BGMはそこから誰かがポロポロしてたみたいで。なんかピアノの端からシルクハットが見えるんですがね。

ピアノの演奏が突如止んだ。

「ムーンライト・セレナーデ。1939年作曲のジャズ曲です」

「・・・あー、お嬢ちゃん。この列車の車掌さん居るかな？」

シルクハットをかぶり、黒の衣装に身を包んだツインテールの少女は宮参鬼の問いかけを無視して立ち上がると、壁にフックでかけてあるベルトを無造作に宮参鬼の方へと放り投げた。

「うわととつ！」

派手にベルトを受け取り損ねた宮参鬼は阿波踊りでも踊るような格好でたたらを踏み、高等部を床にしこたま打ちつけた。

衝撃で目から水金地火木土天海王星に冥王星までが飛び散る。

少女は宮参鬼の方へ歩み寄ると、拾い上げたベルトを鼻先に突きつけた。

「バックル部分を触っていただけますか？」

「は？」

「触っていただけますか？」

「いや、だから何を」

「触っていただけますか？」

「だ、だからあの」

「失礼します」

事態が把握できていない宮参鬼の右手を少女は強引に取り上げると、そのまま掌をバックルに押し付けた。

「あぢっ！」

「ご心配なく、火傷するには温度が低いです」

宮参鬼の手が場所からバツクルに緑色の光が広がり、円形のマークを形成した。

「ご協力感謝します、ギルファスベルトを起動させたのはあなたがはじめっ・・・おや？」

マークの左半分が剥がれ落ち、バツクルに赤い半円形を残した。

「あの、これはいったいどういう・・・」

「あなた、人から好かれるたちですか？嫌われるたちですか？」

「嫌われると自覚してましゃ」

「・・・性格は？」

「自他共に認める悪さですよH A H A H A」

「お金を返さないことも？」

「あ、それはちゃんと返します」

少女は呆れた様な顔でベルトのバツクルをコツコツ叩いていたが、
「ま、いいでしょう。今から1986年のニューヨークに行きますんで、一仕事していただけますか？」

「な・・・何を言われてるのかわからねーと思うが俺も何を言われたのかわからなかった・・・催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ、もっと恐ろしいものの片鱗を」

「このベルトを巻いて任意の返信コードとポーズをお願いします。高層ビルから飛び降りた程度じゃ死なない程度の身体能力とパワーが約束されるですよ」

少女は何処からか取り出したインカムを手早く宮参鬼の頭につけ、ベルトを無理矢理手に握らせると、パチンと指を鳴らした。

それに合わせて宮参鬼が倒れていた床がバタリと開き、宮参鬼の体が落下していく。

「わぎゃああああー！」

間抜けな悲鳴をあげてビルの屋上へと落下していく宮参鬼を少女は笑顔で見送った。

「あなたに、幸あれです」

これが、ギルファスの初陣の前に起こったことのすべてである。

で。

宮参鬼は1935年の砂漠で迷っていた。

容赦なく照りつける太陽が北海道民の体を蝕む。

「あちゅい……」

力尽きかけた宮参鬼が砂漠にひざをつくと、肩にかけていたベルトがポロリと外れた。

「あ、そうだ！それだよ！あたいたら天才ね！」

何を考えたか宮参鬼はいままでがウソのようにスックと立ち上がるとベルトを腰に巻いた。

「HEN SHIN」

「Psychedelic fo

rm

前回に引き続き歪な赤と緑の装甲が宮参鬼の体を包む。

「どっかこの辺を適当にいじってぶわへうあああああ！」

宮参鬼が踵をいじっていると、突如足裏に装着されたローラーが砂煙を上げて回りだした。

「よしイケる！オアシスだ！めざすはオアシスだ！セツコ！」
砂を蹴立てて宮参鬼は走り出した。

自らの喉の渴きを抑えることを最優先に、何処かもしれないオアシスへ向かって。

第三話「歌う人造人間」（後書き）

どうも皆さんこんにちは、やっと姿をお披露目できてうれしい幼女ボイスですよ。

それにしてもあの馬鹿何処まで走っていくんでしょうね。

次回、「明日を捜して」更新未定です、ぺこり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1297f/>

仮面ライダーギルファス：R

2011年10月5日01時49分発行